

誇れる北中の実現

できる! だれでも! どこまでも!

大津の北に燦然と!

逆境に強く!

集団宿泊教室に向かうとある1年生の反応。笑顔で手を振る子、窓にへばりついて両手で愛嬌を振りまく子、レジリエンス高めです。阿蘇でも可愛がられていることでしょう。

ブラジル戦後の田中碧選手の姿からは、代表選手としての責任感の強さはもちろん、勝利への思い、サッカーへの思いの強さが伝わりました。憔悴した様子が他人事とは思えませんでした。：田中だけに。

さて、全日程を終えた今回の中体連大会ですが、優勝・入賞だけでなく力を出し切った北中の選手・チームの姿は、やはり輝いていました。これまで子どもたちを支えていただいた保護者、指導者の皆さんに深く感謝申し上げます。

「優勝したい」「県大会に出たい」「ベスト〇に入りたい」「とにかく勝ちたい」等々、選手それぞれに目標があったと思います。しかし、それが叶わなかった選手は大勢いるでしょう。このように精一杯努力して描いていた未来と現実とに大きな隔たりが生じてしまう状況、これは挫折経験としての逆境です。この逆境を生き抜く力は、これからの不確実で予測不可能な社会において、最も重要な力の一つです。これをレジリエンスと言います。では、レジリエンスを学校や家庭でどう育てていけばいいのでしょうか。

まず自己効力感を育むことだと言われています。自己効力感とは、「自分はこの課題や状況をうまくやり遂げられる」という見通しや確信を持てる感覚のことです。自己効力感とは、「できた」「前より良くなった」とい

う小さな実感の積み重ねによって育ちます。それらの実感につながる気付きや支え、又はその機会を、誰かが与えないと育たないのです。だから、他者とのつながりがとても大切になります。端折って言えば、「可愛がられる子」は、自己効力感が高まり、レジリエンスが向上するのです。

誰からも「可愛がられる子」になるように、あいさつや言葉遣い、身だしなみ等の基本の生活習慣をしつけます。学校でも家庭でも同様でしょう。また、スポーツ等の強豪校ではより厳しい生活指導が行われる傾向にあります。「可愛がられる子」は「応援される子」でもあるからです。

このように、日々のあいさつや言葉遣い、身だしなみなどの小さな積み重ねが自己効力感を高め、他者との関係を円滑にし、ひいてはレジリエンスを高めます。だから、本校の目指す生徒像は「明るくあいさつできる生徒」なのです。シンプルですが、あいさつの大切さ、よさを身をもって実感できた子どもは逆境に強くなります。

憔悴する田中碧選手のもとに、ブラジルの選手が寄り添っていました。そんな敵ながら支えたい人柄、自分のプレーへの責任感、その後の前向きなコメントなどにレジリエンスの高さを感じつつ、今後ますます応援しなくなります。：田中だけに。